

「原爆乙女」の語り部

山岡 ミチコさん

「いまでも悲しみと怒りで身がふるえる。私に青春はかえらない」。高ぶる感情を隠さず、子どもたちに証言し続けた。

高等女学校3年の時、学徒動員の広島中央電話局に向かう途上で被爆した。爆心地から800m。やけどで顔は風船のように腫れ、ケロイドを発症した。

同学年で動員先も同じだった寺前妙子さんは「もとは快活でバレーボールがとても上手な子だった」と振り返る。新藤兼人監督の映画「原爆の子」に賛美歌を合唱するひとりとして出演したこともあったが、顔を気にし、ほとんど引きこもった。

1955年、米国の民間団体の支援で治療を受け、「原爆乙女」と呼ばれた。「投下国アメリカに行けば殺される」と言う人もいたが、元の体を取り戻したい一心で海を渡ると、「申し訳ない」と謝罪する米国人がいた。皮膚移植は27回に及んだ。帰国後は洋裁学校や幼稚園の

癒えぬ苦しみ 戦争の愚かさ伝える

教師を務めた。79年、被爆体験を語り始めた。「生きなさいよ」と言っていて逝った母も、被爆者だった。生きている限り戦争の愚かさを語ろうと、母に背を押されるように旧ソ連やフランスも訪ねた。定期的に広島を訪れたワシントンの高校生らとも交流。親交があった国際ボランティア連絡会議の須田浩之さんによると、「大勢のアメリカ人にお世話になったけど、アメリカ国家のことは、そらあ憎んどる」と語っていた。

2006年8月6日の平和記念式典後、脳梗塞のため自宅で倒れた。左半身がまひしたが、リハビリに取り組んで、証言活動を再開した時期もあった。

証言の最後には、若者に必ずこう訴えた。「私たちが若いころの日本は、思ったことを言えなかった。そんな雰囲気は戦争へと導いた。自分の意見をはっきり言って、未来を大切にしないさい」

(後藤洋平)



国内外で精力的に証言活動を続けた＝2002年6月、広島市中区

やまおか・みちこ

2月2日死去(肺炎)82歳

2月4日葬儀